

月光似鏡無明罪

月光是 鏡に似て罪を明らかにすること無し

風氣如刀不破愁

風氣は 刀のごとくにして愁を破らず

隨見隨聞皆慘慄

見るに隨ひ、聞くに隨ひて皆 慘慄

此秋獨作我身秋

此の秋 独り 我が身の秋と作る

通釈

・黄色にやみつかれ萎えしわんだ血色のない顔、霜をかぶっているかのような白髪頭（これも老いたる身の必然）

・ましてや京より千五百里も離れた西のはてに追いやられた私の容姿がどうなっているか言うまでもなからう。

・今思えば、昔、京に居て得意の時代、私はかんざしや組ひもをして正装で宮中に伺候していたものである。
・ところが今は貶謫の身、任官する束縛から解放されたものの、日々の生活は生い茂る雑草の中の田舎暮らし。

・月光のさやけさは鏡面そのものようだ。（本当の鏡なら人に罪がなければ明らかに顔面を写し、罪科があれば鏡面は曇るといふのに）こんなにも明らかに照り輝いているのに、私の無実を何一つ証してはくれない。
・秋風のつきさすような冷気はまるで刀のそれのようになのに、我が肌身にはつきさせても、私のこの深くこもった愁いは破っては（消しては）くれない。

・そんな月光を見るにつけ、秋風の音を聞くにつけても私には身震いがおきるほどすさまじく感じられる。
・（一般に秋は人々にとり悲しい季節であるけれども）とりわけ今年の秋の愁えは、わが身の上を集まり、